

第1回 南陽市自分ごと化会議 議事録

1 開会

2 市長挨拶

3 自分ごと化会議について（一般社団法人構想日本 石井コーディネーター）

※関連ファイル「01 自分ごと化会議についての説明」参照

- ・今回構想日本から派遣されてコーディネーターとして南陽市に来ているが、本職は逗子市役所で福祉の仕事をしている。
- ・構想日本は、民主正統政権の時の事業仕分けのコーディネーターをしていたが、小さい団体でありスタッフ数も少ない。ただ、私のように全国に自治体職員や民間企業の社員など協力者があちこちにいて、今回のように派遣されてプロジェクトに携わっている。
- ・自分ごと化会議とは、何かを皆さんが決めて責任を取ることではなく、皆さんで話し合っていて、アイデアを少しでも行政の方にいただければというような会議だと思ってほしい。
- ・全国にある2700自治体のうち、既に80自治体で延べ180回会議を実施している。
- ・例として、小学校の廃校後の活用方法をテーマに開催した。なかなか役所で決め切らない、廃校になった学校をみんなの思い入れがある学校をどうやって使おうか。でも役所がそれを責任持って100%決めるのはなかなか難しいので、市民の方に集まってアイデアをいただいて、そのアイデアで新しい使い道を考えていこう、というような形で、この自分ごと化会議を活用される自治体が多い。
- ・運営の仕方について、基本的な考え方として3つある。
- ・1つ目は、無作為抽出で参加者の方を選ぶというもの。無作為抽出は、言い方を変えるとくじ引きであり、くじ引きで当たった人がここにいる。今回は、南陽市民約29,000人からくじ引きで1,000人を選んで、1,000人の中から行ってもいいよという方に参加していただくような作りである。
- ・2つ目は、市民間同士でお話をさせていただくところなので、何かこちらが原案のようなものとかシナリオがあって、これを見てどうでしょう、それに賛成反対とかということではなく、本当に一つ一つのお話を全くゼロから話を始めていただくというのが2つ目の特徴である。
- ・3つ目は、行政に対して何か要望とか不満とか苦情とかそういうことだけではなくて、皆さん1人1人の力を集めて南陽市をどうやって良くしていこうか、今回のテーマで言えば中学校をどれだけ良くしていこうかというところで、皆さんの力をどうやったら力を合わせられるかなというようなアイデアをいただくというのが3つ目の特徴。
- ・今までもこれまでも、市民参加という形で当然市民の意見を取り入れて市の行政を進めていくようなものはあったが、くじ引きというよりは、今までは左側のこのことを考えたいのでみんな

集まってくださいというような形の公募、あるいは下の推薦というあらかじめ関係の深そうな方、関心の高い団体に声をかけて集まっていただくというようなやり方が多かったけれども、それに加えて、くじ引きで一般の市民の方に集まっていただくのもいい方法なのではないでしょうか、というのが我々の提案。

・委員の皆さんには、今回のテーマ「少子化時代の望ましい中学校のあり方」ということについてまず現在の状況を理解していただいた上で、それから皆さんや家族の経験からどういうのがこれからの望ましい中学校なんだろうかということに対してお話をさせていただいて、そこで何か新しいアイデアだとか行政としての新しい気づきみたいなものに繋げていきたい。

・コーディネーター(私)の役割は、時間を管理したり進行をしていく。

・ナビゲーターとして、ちょっと議論が行き詰まったり、ちょっと外の話も聞いてみようかという必要があれば、今回のテーマにふさわしい外部の方をお招きして、少しヒントをいただくというような役割を入れる場合もある。

・日々学校のあり方、中学校をどうしたらいいかを考えている市役所の職員にも議論の輪の中に入れていただいて現状について教えていただいたり意見をいただいたりする。

・事務局は、案内の送付や受付等を行っている南陽市みらい戦略課が担っている。

・今回の自分ごと化会議は全4回開催する。本日は、趣旨説明なので具体的な中身にそれほど入れないと思いますが、第2回3回の会議の中でたくさんの意見をいただきたい。

・最後の4回目では、結論ではないにしろ、少し一つの方向性だとか、いくつかの柱みたいなものにまとめていく予定である。

・お仕事や地域行事等で忙しいと思いますので、会議の欠席はしょうがない。ただ、1回休んだから話が分からなくなるようなことはありませんので、できる限り多く参加してほしい。

4 テーマ説明（南陽市 みらい戦略課長）

協議テーマ「少子化時代の子どもたちの望ましい中学校の在り方」

※関連ファイル「02 テーマ説明資料」参照

・昨年も中学校がテーマだったが、テーマを絞って深い話し合いができればよかったとの声もあったことから、今回は「中学校の統廃合」について議論していただきたい。

・資料には、具体的な数字、中学校の生徒数の推移と中学校の必要な大規模改修費、参考として市内出生者数の推移を記載。また、中学校の生徒数と出生数の推移を可視化するためにグラフ化したものを掲載している。

・現在、市長より教育委員会に対し、中学校の適正配置について検討を依頼しており、教育委員会において検討委員会を設置し中学校の統合について協議いただいている状況。本会議では、それとは別に、市内の中学校は、このまま3校でいいのか、それとも統合すべきなのか、その時は2校がいいのか、1校がいいのかと、自分ごとと捉えていただきから、保護者として、家族として、地域として、本市の子供たちと共に生活する立場としてのご意見を頂きたい。

・議論を深めていただく背景として、中学校の生徒数が少なくなっているということが大きな

要因である。

・資料にあるグラフで分かる通り、極端に出生者数が減ってきている状況。

・例えば昭和40年生まれの赤湯中学校出身者は、1クラス40~42人ほどいて、教室ではぎゅうぎゅう詰めだった。4クラスで戦うスポーツ大会では、強いチームを集めた方が良いか、平等に振り分けた方が良いかと、勝つための作戦を練ったとのこと。こういった議論をしていたということは、人数が多かったからこそできた経験である。

・一方で、同世代で吉野中学校出身者は、1学年で10人ほどだったという。部活動は、男子はバレー部、女子はバスケットボール部と決められていた。

・生徒数が少ないことには、メリットデメリットある。デメリットとして、選択肢が少なくなる、交友関係が狭くなる、応援クラスマッチなどの活動ができなくなるなど、人間が固定化してしまうということもある。

メリットとして、勉強ではマンツーマンで教えてもらえる、活躍する機会が多い、発言できる機会が多い、関係性が親密になるなどが挙げられる。

・沖郷中学校と赤湯中学校の校舎は、設立して40年以上経過している。宮内中学校は、14年と新しいものの、体育館は36年経過している。

・平成30年度、令和元年度修繕費は、小学校も含めたエアコン工事を組んでいたため大きく経費がかかっているが、令和2年度からの修繕費を見ても、7年間で700万台~2000万円台ということで経費がかかっている状況。

・今後、全体で23億円程度見込まれているが、近年の物価高騰や突発的な修繕など、相当な額を要すると考えられる。

・赤湯中学校と宮内中学校では、クラス編成の関係で空き教室がある。沖郷中学校は0となっているが、空き教室を学習室や多目的教室、生徒会室などに活用している状況である。

・隣の高畠町では、4校あった中学校を平成28年度に1校に統合した。教育環境を考えた時に、1校に統合した方が良いとの声が寄せられたためである。校舎は、南陽市同様50年近く経過しかなり老朽化していたとのことであったが、それは統合する要因とはなっていない。あくまでも、子供たちがどのような環境で生活すれば良いか考えた結果だという。平成18年11月に高畠町学校経営計画策定委員会を設置し協議を繰り返し、時には学校と地域が話し合える場を設けながら、検討を始めて10年後の平成28年に統合した。統合することで、今まで分散していた予算を集中できるためより充実した施設を提供できる、部活動の選択肢が増えるなど、メリット面が多く取り上げられ、デメリットはほとんど上がらなかった。開校当初は、スクールバスを5台運行していたが、住民の苦情もあり6台に増便したり、学校が遠くなった子供の保護者からはかなり苦情があったそうだが、教育環境が以前より整っている充実感がだんだん浸透してきたため、その苦情も解消された。

・自身の経験から、保護者や家族の立場から、地域の立場から、不安や考えを共有し、今後の中学校の統廃合について自分だったらというご意見を頂きたい。

5 全体協議（石井コーディネーター）

<全体協議 前半>

・自己紹介(名前、居住地区、どんな人か(趣味や人となり)、テーマについて一言(参加した動機))

<全体協議 後半>

(石井コーディネーター)

学校を1つの箱としてではなく、まず中学校の13～15歳という期間をどう過ごしてほしいか、南陽市の中学生に残したい環境や、解消してほしい悪い環境を話してもらいたい。

(委員自由発言)

強制と言ってしまうとよくないが、ある程度部活動に参加しようというふうにしてあげないと、諦めるのが早くて逃げてしまうようになる。

昭和の世代なので、部活は絶対行かないと先輩になめられるというのがあった。今の子供たちにきつくするのは良くないが、団体行動をとる生活に慣れて欲しいと思う。

会社で見えていても声をかけてあげないと仕事ができない。言われたことしかできない。

自分が学生するとき、テニスコートのブラシかけをしている時に、先輩がボール拾いをしていて、慌ててブラシをかけてボール拾いに移るといふ風に次の仕事を考えていたが、今の子供たち、若い人の一部はできない。体育会系の人にはできるが、部活動をしていなかったり、文化部に行ったり行かなかったりする子は、基本的に言われたことしかしない。強めに注意したら次の日の来ないという風になってしまう。ちょっと精神的な鍛え方が弱くなってきているように感じたので、部活の地域移行はどうなのかなと思っている。

(石井コーディネーター)

中学生にとって、部活で成長する、学ぶ部分が大きく、社会性、空気を読む力を中学生のうちに身に付けて欲しいということか。

(同上委員自由発言)

そういったことを教えることが将来的には子供のためになる。

教えられていないのに、なんでこんなことがわからないのだと言われることが子供にとってかわいそうだ。自分が子供に指導する時には、スポーツのことよりも、将来的に大人になってから何をしたらいいか分かってくれればいいと思っている。

(委員自由発言)

「今の若い人は」という発言は、いつの時代の人も言うこと。自分も言われてきた。しかし、自分たちが若い頃にそれができていたかというところではない。

見て覚える、体験するという事があれば必ず覚える。孫に掃除をお願いしたとき、「何をしたらいい

いのか」と聞かれる。箒かけや草むしり、雑巾がけとそこまで言わないと分からない。しかし、そこまで指示をしてしまうと、それで終わり。綺麗になったらいいという判断を自分でできる、肌感覚でわかってもらえる環境が大事。部活でというのは、必ず上下関係で押し付けるのではなく、先輩がどうやっているのかを後輩が見て覚えていけばいい。そういう感性が子供にあったらと思う。

(委員自由発言)

自分の会社でも、若い子にちょっと注意したら、そのまま職場を出て行ってしまい、やめてしまったことがあった。電話もつながらず、SNS でやめると連絡があり、制服も着払いで返してきた。その子は高校も1か月でやめているような子だったので、今の一部の子は、不安なことがあったら逃げるという癖がついているのかなと思った。最近生徒や父兄が先生に対して強くなっている。そういったところで、何かずれている人がいる。嫌な言い方になるが根性論をどこかで学べないのかなと思う。そういう言う子たちが40代50代になって人にものを教える世代になった時に、どうなっていくのか不安。

(委員自由発言)

根性論的指導に対応できる人とできない人がいる。それで抱え込んでしまって、爆発した同級生が、カッターをもって振り回して歩くようになったことがあった。自分の子供も、学校で色々あって行けない時期があり、その時、自分は逃げていいよと伝えた。それを間違っていると言われていたようでしつかった。子供のことを考えている時、過去に爆発してしまった同級生のことを思い出し、恐怖があった。今は落ち着いているが親としてはそうした時の判断が難しい。学校では、何か問題が起きた時に、答えを用意してくれる。何が原因か選択肢を用意してくれるから、子供たちが自分で考えるのをやめてしまったのだと感じ、そこに悲しさと切なさを覚える。

自分は親なので、頭ごなしに言うこともあるが、学校では、優しく教えているんだなと感じる。

(石井コーディネーター)

教えすぎて自分で考えないようになっていくという話に共感する。普段、小学生にサッカーの指導をしていて、監督が怒鳴るということもなく優しく指導するが、プレーの中での答えを大人が教えすぎて、自分で考えるという事ができない子がいる。社会性、周りを見たりということができなくなっているというのは皆さんに共通している感覚だと思う。逃げるという事については、社会全体としては、本当に厳しい所から逃げて自分の身を守るという事は認められてきている。学校に行かない子供も増えてきていて、社会的な課題ではあるが、指をさされることはなくなっている。逃げるという言葉はマイナスだが、自分を守るという面ではプラスだと思う。

(委員自由発言)

高校の部活動で、監督から「今までは厳しくして強くするという練習だったかもしれないが、これからは自分たちで考えて練習しなさい」と言われた。本当に結果を出しているチームは、自分た

ちで目標に向けて強くなりたいと思って自然と追い込んでいる。このような自主性も大事だと思うが、過去の例がというよりも、自分で見て学ぶきっかけがあると違うのかなと思う。

(石井コーディネーター)

中学生の時は、自分で考える、見極めるというような力はどうだったか。

(同上委員自由発言)

コーチに足腰を鍛えろと言われ走っていたが、本当に意味があるのかと思っていた。進学した後に、結果的に意味があったと思った。勉強も同じ。過去にやっておいてよかったという実体験があった。

(委員自由発言)

地域の不登校の子供のケアをしている方の話で、その子たちが高校卒業資格を取りたいといったタイミングで、カタカナや漢字が書けないという子がいるのに気付いて、そういった最低限の教育を受けられる場所を作る必要性に迫られるということが発覚した。少しでも学校で過ごせる時間を増やせるような関わり方をしてほしい。地域の人が話し相手になったり、守ってくれる人がいることが大事。部活で社会性が伸びるといのは共感する。挨拶をしなかった子が、スポーツ少年団に通い始めたら挨拶をするようになったことがあった。親の言うことを聞かない子供も、好きなことを教えてくれるコーチが言う事ならと言うことを聞く子もいる。厳しさがあいながら、いいところは褒めながら守ってくれる人が必要だと思う。これは大人側の問題かもしれない。

(委員自由発言)

自分の時代はダメだったが、今はいいんだという許容範囲を広く持たないと指導や育成は難しいと思う。自分がこれから生きていくのに合ったところを選択していくことをアドバイスしないと、色々な才能を持った子供たちが伸びない時代になったと思う。優秀な人もいれば回り道をしてゆっくり進む必要がある人もいる。正解だけ押し付けてもためにならない。一般的などころについていけないとだめという事ではない。子供が苦しんでいる時に、親も一緒になって泣いたりしてくれること、自分の心を強くするような存在である祖父祖母と同居しないケースが増えている。今できないことは認め、またいつか必ずできると希望に導いてくれる大人がいないとダメだと思う。

(委員自由発言)

自分の子供が苦しんでいることをカウンセラーに相談してみたいと子供に言ったこともあるが、同級生に知られるのが嫌だというので断られた。自分としては、カウンセラーと密になって話してみたい。

(委員自由発言)

子供に指導する際は、逃げ道は作っている。ただ、部活をやめる子には、やめたらもう一回やりた
いってというのはなしだと教えている。

南陽市の中学校の部活を強くして、良い指導者がいることが分かれば、他の地域からも人が来て、
スポーツもできて立派な大人にもなれるという場所を作ればいいのではないかと思う。

(委員自由発言)

子供に一番近い親や教師、同級生がどう向き合うかが大事。子供の周りの環境がどれほど健康
的かという事が大事。宮内の中学校では1クラスが26人しかおらず、学校全体で211人で少人
数だ。子供同士でちゃんと喧嘩ができる環境があれば、子供はちゃんと育つ。押し付けられる学
びでなく、自分で考えていける学校、卒業してよかったなと思える環境を作っていくことが大事。

(石井コーディネーター)

そういった環境を、どう自然体でどう提供できるかというのが、この4回のテーマではないかと思
う。その環境には、親や先生、仲間、外部指導者等の周りの人を含めて関わっている。その3年
間でこういう環境だったらいいよねということを考えていきたい。

(委員自由意見)

高畠中学校はとても大きい学校で生徒数も多い。自分のクラス以外の人顔も知らない環境で
育ったら恐ろしいと思う。少人数であればこそ、そういった環境を作るのは可能かなと思う。大
きい学校は管理する側は楽だと思うが、環境をよくするのは難しいと思う。

(石井コーディネーター)

小さい学校から大きな学校に移るギャップをいつ作るかというのを、12歳で中学校に上がる時
なのか、15歳で高校に上がる時なのかを地域としてどう考えていくかというのが今回のテーマ
だと思う。過去に岡山県の新庄村という800人程度の村で中学校の環境を考えるというテーマ
でやったことがある。小学校も中学校も1つで、子供自体が50人くらいしかいない。高校に出る
タイミングで家を出て他の大きな町に下宿する。知らない人と初めて過ごす時に感じるギャップ
をどう埋めるかという議論をした。

今までの話を聞いていて、このような一回り大きなところに出ていくギャップをどうするかがテ
ーマになっていくと感じた。

(委員自由発言)

2年ほど前に、荻小学校の統合に関する話し合いに参加した際に、いずれ社会に出て大人数に参
加するのが当たり前なので、早い段階から宮内小学校と統合してくれという意見が保護者から
出て、統合が1年前倒しになったことがあった。自身も吉野出身で、小学校は複式学級で中学校

もみんな顔見知りだった。高校に上がった時にギャップが生まれ1から友達を作るのに苦労した経験がある。今日の議論を聞いてギャップを埋める作業をしたほうが良いと思った。

自分の子供が荻小学校の学区で学年1人だったため、統合してよかったと思う。

(委員自由発言)

自分の子供のことを考えると、幼稚園で一緒に遊んでいた子と離れ離れになって、苦労したり悲しい思いをしているのではないかと思う。小学校で6年間過ごしても、中学で新しい友達ができることを考えると、高校、大学とステップアップしていくので、早めにギャップを経験しておいてよかったと思う。

(委員自由発言)

今の中学校の状況が全く分からないので発言できない。私の時は、中学校では部活に全員入ることになっていたが、今は入らなくてもいいのか。職場体験に来た中学生が、不登校の子供が学年に10人くらいいるという話を聞いて、自分の時は4人だったので、なぜそんなにいて、どんな理由があるのかなと思った。

(担当課)

生徒数は、沖郷中学校は228人、赤湯中学校は310人、宮内中学校が211人で合計749人。今の1歳の子が中学校に入学するころには、400人台になると予測されている。

部活について、学校規模によって設置されている部活が異なる。宮内中学校は生徒数が少なくなり、柔道部と剣道部は現在なくなっている。ただ、そのスポーツに打ち込みたい生徒は、地域クラブに所属して中体連の大会に参加している。宮内地区の柔道クラブの取り組みは好事例として県内で取り上げられている。

部活は任意加入制が基本だが、南陽市では原則加入することになっている。教育的な効果や異学年での結びつきが強い意義ある活動をしてきて、多方面に活躍する人が増えた。反面、部活動を起因としてよくない思い出がある生徒も増えてきている事実もある。

不登校には、自身の気質や、友達関係、先生との関係、発達特性、家族関係などが様々あり、複合的な要因がある。一点突破で不登校を解消するという事は難しい。それぞれに要因が違うので、それぞれ個別に対応している。教育相談室や、別室で学ぶ環境を整えている。また、現在、タブレット端末を1人1人に貸与しているため、オンラインを活用して授業を行ったり対応している。

小学校から中学校への接続や高校への進学ということも1人1人丁寧に対応している。

(石井コーディネーター)

全国的に見て南陽市の中学生の不登校数は多いのか。

(担当課)

決して少ないとは言えないなと思っている。学校に登校することだけでなく、その子が社会的に自立するというものを目指して先生方や保護者の方、関係機関との様々な連携に取り組んでいるところ。コロナ禍で、休む機会が増え、登校しないハードルが下がったためか10年前より増えている。暫く前は、学年が上がるにつれて不登校が増えていた傾向があったが、今は低学年もできてきている。その要因は不明。その子の発達段階に応じた対応を現場ではしている。

(委員自由意見)

娘の時に、宮内中学校が統合された後で、当初は地域ごとにグループが出来ていたが、部活をしている間に子供たちも仲良くなってなじんでいった。下の子が入学する頃には、学年の人数も減ってだんだん寂しくなったと感じる。1番目は4クラスありぎゅうぎゅう詰めで、2番目は3クラスで、3番になると少なくて来ていると感じた。

(石井コーディネーター)

そういった、家族内で一番上の子と下の子で環境の違いがあれば次回教えて欲しい。

(委員自由発言)

自分は中学校を1つにしなくてもいいんじゃないかと思う。他の中学校と比べても生徒数が少なかったが、充実していて楽しかった。これは、人が少なくて皆知り合いだったからだと思う。大人数で、学年があがって初めて見たような子がいたりして、その大人数の環境で友達ができるかと考えると入っていきにくいなと思う。もっと人数が減ったら統合も考える必要があるかとは思いますが、今すぐは統合しなくていいと思う。

(石井コーディネーター)

高校に上がった時はどうだったか。

(委員自由発言)

友達もできなくて最初は怖かった。中学校の時は、17人しかいないクラスだったからこそ入って行けたのかなと思う。その面では大人数のクラスが中学校からというのも良いのかもしれないと思う。

(委員自由発言)

最近見た映画で、思春期に入った女の子が新しく出る感情に葛藤しながら自分らしさを見つけるというストーリーだった。自分自身も中学校時代にそんな風に悩みながら生活していた。中学校でどういう風な学びをさせたいのかという事が一番大事なんじゃないかと思いながら聞いていた。自分も体育会系だから、部活では社会でやっていける力や、諦めない逃げないということは

学んできたので大切だと思う。ただ、親や教員等の子供を支える人の余裕がないと感じる。子供ができると自分の生活もなくなり忙しくなる。教員の仕事も忙しくなると子供と向き合う時間も減っていくと思う。

地域でも子供たちを支えていかなきゃいけないという事も、なるほどと思いながら聞いていた。地域のおばあちゃん、おじいちゃんの挨拶というのも最近はない。親と保護者と地域とみんなで子供を育てていかなきゃいけないと思う。

目指すところは子供をちゃんと育ててあげなきゃいけない、社会で生きていく力をつけてあげたいという目標に向かって、保護者としても学校に投げっぱなしでなく、地域と保護者と学校でちゃんと見守っていかなければならないと感じた。中学生は思い悩む時期で、心の変化もある時期だから、安心して自分でいられる場所として中学校があればいいなと思った。その余裕を大人たちで作って行ければいいなと思う。

(石井コーディネーター)

中学校の3年間で思い悩む時期に直面するのはあるはずなので、それに対して環境、今の話で言う学校、地域、親に何ができるかという話を次回以降詰めていきたい。

子供の数が減っている中で、3校の中でその環境を提供しているという事実を踏まえて、地域も含めて何ができるかということが我々に与えられた課題になる。

次回までの間に、中学生の下校シーンではどんな顔をしているかなと表情を見るかもしれないし、ご家族で話をさせていただいて何か見つかることもあるかもしれない。そういったことから考えてきてもらいたい。

<会議終了>